

第2部 課題解決実習実践検討会報告

【児童生徒支援コース】

氏 名	実 習 校	課題研究テーマ	日程と形式	頁
阿部 明子	渋川市立渋川北中学校	中学校国語科における叙述に即した読みを身につけさせるための指導の工夫－質問作りを基盤とした学習方略の使用を通して－	10月21日 公開授業及び実践検討会	86
飯塚 佳乃	邑楽町立長柄小学校	算数科における問題解決促進のための学習支援の工夫－文章題解決の4つの下位過程に着目して－	11月12日 公開授業及び実践検討会	87
金子 公江	桐生市立中央中学校	自分の伝えたいことをまとまりのある文で表現する中学英語科指導～「逆向き設計」による到達目標を共有した指導過程の工夫～（仮題）	11月20日 公開授業及び実践検討会	88
木暮 祐輔	渋川市立北橋中学校	中学校音楽科における『思考・判断・表現』する力を高める指導法の研究－協同的な学びを通して－	9月4日 公開授業及び実践検討会	89
桐生 直也	富岡市立高瀬小学校	情報を関連付けて読む力を育てる小学校国語科学習指導－スキーマの可視化により文章の全体像と部分とをつなぐ指導を通して－	11月11日 公開授業及び実践検討会	90
坂口 翠	藤岡市立藤岡第二小学校	つくる喜び、達成感を味わうことができる絵画指導～図画工作科における「教えて考えさせる授業」の工夫～	10月22日 公開授業及び実践検討会	91
須藤 宣之	嬬恋村立嬬恋中学校	望ましい集団形成のための話し合い活動－教育ファシリテーションの多様な支援を通して－	11月13日 公開授業及び実践検討会	92
関口 智子	前橋市立勝山小学校	数学的な思考力・表現力を育てる算数科学習指導－問題解決的な学習の改善を考える－	10月23日 公開授業及び実践検討会	93
津田 千春	前橋市立城東小学校	児童の意思決定能力を育てる情報モラル教育に関する実践研究	11月12日 公開授業及び実践検討会	94
土浦 紗弥	高崎市立佐野中学校	生徒の学習意欲を高める中学校英語科指導－学習方略を身に付けさせる指導を通じて－（仮題）	10月31日 公開授業及び実践検討会	95

【学校運営コース】

氏 名	実 習 校	課題研究テーマ	日程と形式	頁
青木 美恵	高崎市立塚沢小学校	教員が抱える職務上の課題解決のための方策－初任者教員へのOJT実践－	11月14日 公開授業及び実践検討会	96
新井 健一	伊勢崎市立豊受小学校	教師の意識的な実践を促すキャリア教育の推進－キャリア教育の視点に立った総合的な学習の時間の再構築を通して－	12月5日 公開授業及び実践検討会	97
神戸 智宏	下仁田町立下仁田中学校	地域づくりの担い手育成をめざす総合的な学習の時間のカリキュラム開発－「下仁田ジオパーク」を活用した実践を中心にして－	12月5日 公開授業及び実践検討会	98
周東 景子	みどり市立笠懸小学校	教師の授業力向上のための手立ての工夫－教師全員が参加する校内研修と子ども全員が参加する授業を目指して－	12月3日 公開授業及び実践検討会	99
二宮 一浩	太田市立綿打中学校	組織的な家庭学習指導の確立を目指す推進体制づくり－教科担任、学級担任、保護者の連携を通して－	12月1日 公開授業及び実践検討会	100
柵木 秀樹	藤岡市立美九里東小学校	社会に自立する力を育むキャリア教育の推進～児童の意欲向上を目指した教育実践を通して～	11月28日 公開授業及び実践検討会	101

阿部 明子(児童生徒支援コース) 平成26年10月21日(火) 渋川市立渋川北中学校

児童生徒支援コース2年生の阿部明子さんの「課題解決実習」に伴う公開授業及び実践検討会が、10月21日に勤務校の渋川市立渋川北中学校(1年3組)で行われました。

阿部さんの研究テーマは「中学校国語科における叙述に即した読みを身につけさせるための指導の工夫―質問作りを基盤とした学習方略の使用を通して―」です。阿部さんは、子どもの課題を、全国学力・学習状況調査の結果やこれまでの指導経験から、学習指導要領の「語句の意味理解・文章の解釈・自分の考えの形成」の学習過程に当てはめ、「大雑把に読めても叙述に即して読むことができない」。そのため、「手がかりとなる言葉等のポイントを押さえられず、要点をまとめたり教師の発問にも答えられなかったりする」。よって、「書かれていることを読んで自分の考えを持つことができない」と押さえました。この課題解決のために、主に認知心理学の知見をもとに研究を進め、「質問づくり」という読み方に着目し、実践を重ねてきました。

「質問づくり」は、本文を読んで疑問に思ったことを質問にして、その答えを考えながら読み取るというものです。実践の最初は、「どうして～か?」「～とはなにか?」という表現を示して「質問づくり」に慣れさせました。授業では、個々が考えた質問を持ち寄り、グループで話し合い、すぐに答えられる質問をふるいにかけるなどして、文章読解にふさわしい質問に練り上げ、これを通して読みを深めていく学習を繰り返してきました。この間、比喻や情景描写等の表現技法の学習や他の読解方略(例えば、人物の言動に線を引く)を適宜活用させることにも配慮しました。

公開授業は、「大人になれなかった弟たちに…」(光村図書中1国語)の、弟のヒロユキが亡くなり病院から亡骸を背負った母と僕が白い乾いた道を疎開先の村に歩いて帰る場面を扱いました。澄んだ青空にB29の機体がきらきらと輝いている情景を描いた描写は、僕のどういう気持ちを表しているのか? どうして母は「ヒロユキは幸せだった」と言ったのか?の二つの質問に答えることを中心に据えました。生徒一人ひとりが関連する叙述、その行間を読み、その後、グループで話し合い、グループとしての考えをまとめていきます。ところが、なかなか個々での学習が進みません。グループになってからの話し合いも停滞しているようでした。しかし、友だちの発言によって、言葉にはなりきらなかった思いを言葉として確認できたなど見えないところで学習の深まりがありました。

実践検討会は、渋川市教育委員会・湯澤知佐子指導主事様、飯塚匡校長先生、校長先生の配慮で参加してくれた渋川・北群馬教育研究会中学校国語科研究部の先生方14名、本学大学院生2名で協議が行われました。阿部さんの生徒中心の、質問づくりを通しての協同学習に対し、教師対生徒の対話形式で進める一斉授業が取り上げられ、参加者からはその経験を踏まえ賛否の意見や感想が出されました。教師が対話をリードし積み上げて本質に迫ったかどうかという意見、一方、グループの交流で生徒一人ひとりの学習の深まりを見取って、提案性のある授業であると評価する意見もありました。指導講評で、湯澤指導主事様から生徒が自分の疑問から出発する読みであり、そのために叙述に戻る読みをグループにおいてもしていたと評価していただきました。読みの学習では、テキストに、過去の自分(の読み方)に、他人(の読み方)の三つに関わることが大切であるとまとめをいただきました。最後に、本学・佐藤浩一教授よりお礼を申し上げ閉会しました。(文責 武井英昭)



飯塚 佳乃(児童生徒支援コース)

平成26年11月12日(水) 邑楽町立長柄小学校

児童生徒支援コース2年生・飯塚佳乃さんの課題解決実習に伴う公開授業及び実践検討会が、11月12日に勤務校の邑楽町立長柄小学校(第5学年)で行われました。

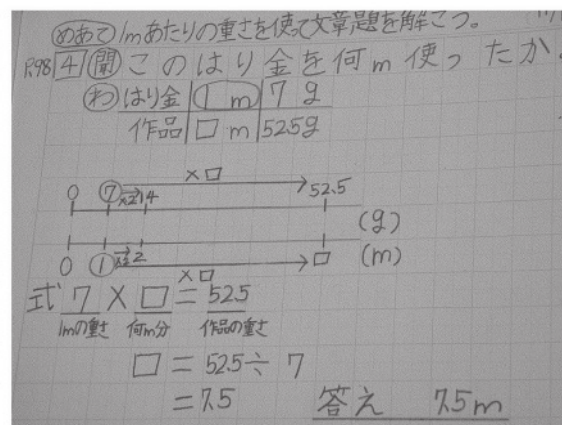
飯塚さんの研究テーマは「算数科における問題解決促進のための学習支援の工夫—文章題解決の4つの下位過程に着目して—」です。認知心理学の研究から、文章題を解くには「変換(問題文中の言葉や文の意味を理解する)」、「統合(問題に表現されている状況を理解し、何が問われているのかわかる)」、「計画(解き方の計画を立てる)」、「実行(計算して解を出す)」という4つのステップを踏むことがわかっています。これは、どのステップでもつまずく可能性があるということ、それぞれのステップでの適切な支援が必要であることを意味しています。

公開授業では第5学年の単元「比べ方を考えよう・単位量あたりの大きさ」が扱われました。人口密度のように異種の二つの量(人口密度では面積と人口)の割合を考えるという、かなり難しい内容です。授業では「1mあたりの重さが7gのはり金を使って、工作をしました。できた作品の重さは、52.5gでした。このはり金を何m使いましたか」という問題を考えました。

飯塚さんがはり金の模型を示して、「定規では長さが測れない。そこでみんなの知恵を集めて、長さを考えよう」と呼びかけて授業がスタートしました。そして文章題解決の下位過程に即して、変換(大事な数字やキーワードに印をつける)、統合(数値の関係を表に整理する、数直線上に数値を記入し数量の関係を確認する)、計画(数直線をもとに立式する)、実行(計算を行い解を求める)、という4ステップを丁寧に踏みながら、授業が進められました。また各ステップでの思考や理解を確かなものとするために、変換(数字やキーワードを全員で確認する)、統合(簡単な数値「1mあたり7gのはり金で14gの作品ができた」を例に使い数量関係を考えさせる)、計画(ペアで式とその意味を説明し合う)、実行(得られた解の意味を問題文に照らして確認する)という丁寧な支援が組み込まれていました。児童は飯塚さんの支援のもと、一つ一つの過程を着実に踏みながら、問題解決に向かっていきました。

実践検討会には、東部教育事務所・栗原淳一管理主事様、邑楽町教育委員会・岡部義彦指導主事様、実習校の福島慶子校長先生はじめ先生方、教職大学院のM1院生3名が参加しました。学力に課題のある児童にも十分配慮した指導と支援、間違いを消さずに残すノート指導、かけ算の式の意味を確認する指導(7×□と□×7の違い)などが高く評価されました。そのうえで、さらに学習の深まりを目指して、①数直線の学習(数直線上で答えの目安をつけ見通しを持つことの大切さ)、②説明活動の在り方(適切なタイミングや説明の内容、教師からのモデル提示の方法、児童が自分の説明を自己評価できるにはどうすればよいか)、③単元構成(児童の実態を踏まえて単元構成のなかに1回=45分の授業をどう位置づけるか)、④少人数指導(プラス面とマイナス面)などについて、充実した協議がされました。また、栗原管理主事様と岡部指導主事様からは、大学院での成果をぜひ学校や地域の学力向上に活かして欲しいと、励ましと期待の言葉を頂きました。最後に教職大学院・佐藤教授から謝辞を申し上げ閉会しました。

(文責 佐藤浩一)



金子 公江(児童生徒支援コース) 平成26年11月20日(木) 桐生市立中央中学校

11月20日、児童生徒支援コースの金子公江教諭の公開授業と授業検討会が、置籍校である中央中学校の3年2組で行われました。金子院生の課題研究テーマは、「自分の伝えたいことをまとまりのある文で表現する中学英語科指導～「逆向き設計」による到達目標を共有した指導過程の工夫～」(仮題)です。

金子先生は、中学校の英語科で「書くこと」が、一般の全国学力調査でも置籍校においても困難な課題としてあることに着目されました。これはもちろん「書くこと」だけを目的とした指導ではなく、「読む、聞く、話す」ことも含めた英語力全体を高度に統合するためのものとして英作文を位置づけ、生徒に英語の高い活用能力を身に付けさせることが目的です。最近の教科書でも、單元ごとの章末課題として、高度なパフォーマンス課題(自由英作文など)が設定されています。この單元末の課題を具体的な目標とし、そこから「逆向き設計」で実に丹念なカリキュラム設計をされました。各授業でそのための緻密な帯活動を設定し、優れたインプット活動をもとにしての、アウトプット活動を展開する授業を一貫して実践されてきました。



本時は、英語科の「Writing Plus 2 レポート」という單元の中で、全3時間の中の2時間目の授業でした。この教材ではある主張を、根拠を持って英作文でレポート作成することをねらいにしています。教科書ではレジ袋の是非というレポート作成ですが、それをさらに活用・定着させるために、今回は「宿題が必要か否か」という教科書よりも高度な、それでいて生徒には身近な問題設定を行い、必要(不必要)ならばその根拠をもとにした英作文を作成することを、グループ学習を通して高め合うというパフォーマンス課題に生徒は取り組みました。授業では、ほぼ全員の生徒がこの困難な課題に最後まで集中して取り組んでいました。年度当初は自由英作文というと尻込みする生徒が多かったのが、各自が主体的に英語で意見を書いてみようとする姿が本時ではほとんどの生徒に見られ、生徒たちの成長がうかがえました。この半年以上金子先生の授業を参観してきて、一瞬も授業時間を無駄にする事なく、計算された適切な発問をすることが先生の指導力の高さですが、そのための授業準備が本時でも実に丹念になされていました。金子先生の指導スキルには、参観した筆者らも毎回感心させられることが多いものでした。金子先生の研究・教育活動を長期間にわたり、ご支援頂いた中央中の先生方に御礼申し上げます。

公開授業と授業検討会には置籍校の先生方が校長、教頭、教務主任ほか多くの先生方が同席し、県教委人事課の鈴木先生、川端先生、東部教育事務所からお見えになりました。本学 M2 の土浦院生、指導教員である山口、石川と多数が参加しました。授業検討会では、金子先生の指導力の高さが再確認されるとともに、課題研究のテーマである「逆向き設計」の理論が、実際の指導に具体的・効果的に結びついている点にも高い賞賛を受けました。金子先生の卓越した指導スキルを少しでも第三者に伝えるためにも、課題研究論文に、これらの成果が記述されることが望まれます。(文責：山口陽弘)

木暮 祐輔(児童生徒支援コース) 平成26年9月4日(木) 浜川市立北橋中学校



っている要素」を媒介としながら、協同的な学びを中心とした授業づくりに取り組んできました。

研究授業の題材は、第1学年「詩や曲の雰囲気を生かして歌唱表現を工夫しよう」、教材名は「赤とんぼ」でした。音楽を形作る要素を手がかりにして交流学习による協同的な学びを行うことは、詩や曲の雰囲気を生かして一人一人に表現を工夫させるために有効かどうかは視点でした。

まず全員で「赤とんぼ」を歌い、前時の学習である「歌詞が表わす情景や言葉のイントネーションと旋律の高低とが一致していること」を振り返りました。続いて、グループに分かれて交流学习が行われました。はじめに、4人ずつ8つの「指令書グループ」に分かれ、それぞれ配られた「指令書」に書かれている指示に従って学習が進められました。「指令書グループ」は4つの「強弱チーム」と、4つの「速度チーム」からなり、「強弱チーム」では「音が高くなっている／低くなっているところはどこか」を調べさせ、どちらに向かって声を大きくするのかを話し合わせ、「速度チーム」では「歌詞の中で一番大事にしたい言葉は何か」を調べさせ、その部分がはっきりと聞こえるように速度を工夫させました。どのグループも、考えたり、話し合ったり、試しに歌ってみたりしながら、真剣に「指令」に取り組んでいる姿がみられました。



続いて、グループを組み換え、8つの「ホームグループ」を作りました。各「ホームグループ」は、「強弱チーム」から2人、「速度チーム」から2人、計4人で構成されました。そしてグループごとに、「指令書グループ」で話し合ったことを説明し合い、さらに表現の工夫を考えながら、拡大楽譜へと書き込ませました。拡大楽譜が出来上がったグループは、実際に歌ってみてその工夫を確かめて行きました。

最後に、グループの特徴ある工夫を紹介しながら、全員で歌ってみて、表現の多様性に気付かせ、それぞれの良さを認め合いました。

授業後の実践検討会では、授業展開や指導上の留意点について細部にわたって指摘がなされ、木暮さんの今後の授業づくりに向けた貴重な学びとなりました。今回は中沢守学校長、長谷川佳子教諭、本学から吉田秀文先生、山崎法子先生、そして教職大学院2年次生にもご参加いただき、多くの貴重な示唆をいただきました。感謝申し上げます。(文責・音山)

9月4日、児童生徒支援コース2年生の木暮祐輔さんの研究授業と実践検討会が、浜川市立北橋中学校で行われました。木暮さんの課題研究のテーマは「中学校音楽科における『思考・判断・表現』する力を高める指導法の研究―協同的な学びを通して―」です。木暮さんは、楽曲を聞き、歌詞を読み、実際に歌うという一連の活動において、楽曲についての知識理解はあっても、それをもとに思考・判断し、表現へと結びつけることには課題がみられるという全国調査の結果に着目しました。そして、音楽における「思考・判断・表現」を育むために、生徒同士の関わり合いを重視し、「音楽を形作



桐生 直也(児童生徒支援コース) 平成26年11月11日(火) 富岡市立高瀬小学校

11月11日、児童生徒支援コースの桐生直也教諭の公開授業と授業検討会が、置籍校である高瀬小学校の6年3組で行われました。桐生院生の課題研究テーマは、「情報を関連付けて読む力を育てる小学校国語科学習指導スキーマの可視化により文章の全体像と部分とをつなぐ指導を通して」（仮題）です。

桐生先生は、国語科で「読むこと」における情報の関連付けが、一般の全国学力調査でも、また置籍校の児童においても非常に困難で、課題としてあることに着目されました。そこで児童が部分と全体とがなぜ関連付けられないのかを考え、テキストの全体像を児童がつかみにくい点を克服するための工夫をこらす授業を実施してきました。工夫の一つとして「説明的文章」「文学的文章」が特有に持っているスキーマの構造を児童が獲得することで、それをもとに深い読みに児童が到達することができるのではないかと仮説を立てて、実践されてきました。具体的なその手段としては、「図式化」「可視化」といった手法を取り入れて、巧みなワークシートや板書の工夫、さらには協同での学びをふんだんに取り入れた授業を実施されています。



本時は、国語科で「『鳥獣戯画』を読む」という単元の中で、全6時間の中の5時間目の授業でした。この教材では『鳥獣戯画』が人類の宝であるという筆者の主張がなされています。この説明的文章が持つ特有の構造である、根拠をもとにして主張がなされる構造（＝スキーマ）を児童に獲得させた上で、著者が何を根拠に何を主張しているのかをまとめさせる授業であり、ワークシートと付箋の活用や、グループ学習を通して授業は進められました。主張の根拠を全文から抽出してうまくまとめることは、課題が非常に難しく、最初は書けない児童もいました。しかしその答えをトップダウン的に教師が教え込むわけではなく、児童自身が自らの言葉でまとめることを教師が待つことで授業を進行されていました。ほぼ全員の児童が、1時間目の初読の際に筆者の主張に納得できなかったのですが、5時間目の現時点では、ほとんどの児童が筆者の主張に納得できたので、今度は自分自身を説得する言葉を考えてみようという授業の進め方は見事でした。この半年以上桐生先生の授業を参観して、もともと確かな指導力をお持ちであったと思いますが、さらにその指導力に磨きがかかったと感じられました。桐生先生の何回にもわたる研究授業を長期間にわたり、ご支援頂いた高瀬小の先生方すべてに御礼申し上げます。

公開授業と授業検討会には置籍校の先生方が校長、教頭、教務主任ほかほとんどの先生方が同席し、他校の教員や県教委人事課の鈴木先生もお見えになりました。本学M1も3名、指導教員である山口、石川と多数が参加し、盛大な授業検討会になりました。そこでは、桐生先生の学級経営の確かさ、口調・説明の丁寧さ、しっかりと時間をかけて授業を進めるその姿勢に賞賛の言葉がありました。本課題研究テーマを進めていくにあたり、その効果検証に具体的にどう取り組むのか、また、図式化のためのワークシートの多用については、再検討した方がよいかもしれないという重要なご指摘を鈴木先生から頂戴しました。これらの指摘を踏まえ、課題研究論文をより充実したものにされることを望まれます。（文責：山口陽弘）

坂口 翠(児童生徒支援コース)

平成26年10月22日(水) 藤岡市立藤岡第二小学校

公開授業は、課題研究テーマに基づき図画工作科において行われ、28名の方々に参観いただきました。

坂口さんの課題研究のテーマは『つくる喜び、達成感を味わうことができる絵画指導～図画工作科における「教えて考えさせる授業」の工夫～』です。絵画指導の工夫において、市川伸一(2008)が「教えて考えさせる授業」で提案している、「教師の説明」→「理解確認」→「理解深化」→「自己評価」の4段階(以下、「教師の説明」は「教える」とする)をスパイラルに捉え、授業設計を進めました。

6月のねらい(b)では、図画工作科6年、単元名「心に浮かぶ夢の世界」(8時間扱い)で、授業改善の視点を児童の実態から設定し、「教えて考えさせる授業」による指導の工夫を試みました。児童の下書きと色塗りに視点を置き、それぞれの「教える」段階で『描くコツ』による指導を行うため、単元構成において4段階を2サイクル取り入れました。結果、児童は『描くコツ』に基づき、個々の下書き、色塗りに取り組み、作品を完成することができました。

公開授業は、単元名「表し方を工夫して」題材名「ランドセルと6年間」(10時間扱い)



の第1時としました。単元構成において、ねらい(b)での学習成果をもとに、4段階をスパイラルに取り入れました。児童の実態から授業改善の視点は「ランドセルを立体的に描くコツを教えることにより、児童は、ランドセルを描く角度や背景との構成を考え、より自分の思いに近い表現で作品を描くことができるようになるであろう。」としました。

指導の工夫として、本時の授業展開に「教える」「理解確認」の段階を設定しました。「教

える」段階では、学習のめあてを「コツを使って立体的にランドセルを描こう」とし、ステップ毎に取り組める児童用ワークシートを作成し活用しました。児童はランドセルを直方体に近い形とみたと、大まかに直方体を描いてから、ランドセルの形にしていくことを理解し、①直方体の描き方(ステップ1)、②角をとって丸める(ステップ2)の手順により練習しました。次に、③補助線や方眼を使わずに立体的なランドセルを描く(ステップ3)、④ランドセルの置き方を変え、好きな角度から見た立体的なランドセルを描き練習を重ねました(ステップ4)。さらに、⑤いろいろな置き方のランドセルを描こう(ステップ5)に取り組みました。児童一人一人が思いや考えを描き易い工夫となっていました。「理解確認」では、ステップ③をB規準(立体感のあるランドセルを描いている)、ステップ④・⑤をA規準(ランドセルの置き方を変えるなど自分が描きたい角度から、ランドセルを立体的に描いている)からみとり評価を行っていました。

実践検討会は、柴岡則之校長をはじめ、藤岡市立第二小学校の先生方、藤岡市立北中学校後閑美智子先生、院生藤巻直子さん、他大学の学生の方々、指導教員を含む

13名にご出席いただき開催することができました。「教えて考えさせる授業」による単元構成、指導の工夫に関して、出席された先生方から高い評価を受けました。また、個々の児童が自分の思いに近い表現で作品を描くことについて協議されました。多くの貴重なご示唆をいただき心より感謝申し上げます。(文責・懸川)



須藤 宣之(児童生徒支援コース) 平成26年11月13日(木) 嬬恋村立嬬恋中学校

11月13日、児童生徒支援コース2年生の須藤宣之さんの公開授業と実践検討会が、勤務校である嬬恋村立嬬恋中学校で行われました。

須藤さんの課題研究のテーマは「望ましい集団形成のための話し合い活動ー教育ファシリテーションの多様な支援を通してー」です。須藤さんは、「話し合い活動を通して、集団の一員としてよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる」ことを研究の目的に据えました。そして、「ワールド・カフェ」など話し合いの手法を取り入れながらも、単に話し合いの技法に焦点を当てるだけでなく、生徒同士の相互理解や集団の向上を目指し、集団の成員相互に所属感や連帯感を持たせ、個々には自己肯定感や自己有用感を育むことも目標としました。



公開授業で取り上げられた話し合い活動は、合唱コンクールの振り返りをもとに、一人ひとりの行動目標を決め宣言するという内容でした。話し合いは、「ワールド・カフェ」の手法をベースに、須藤さんが「カフェ・ホスト」となって、独自の工夫を加えた形式で進められました。まず5人組の班に分かれ、話し合いの進め方(カフェ・エチケット)を確認した後、テーマ①「合唱を成功に導いた理由は、何だと思いますか」が示され、話し合いが始まりました。生徒たちは、模造紙や付箋に考えや気づきを書き込みながら、自由に自らの考えを発言し、真剣に仲間の考えに耳を傾けています。須藤さんは、テーブルを回り、模造紙に書かれた言葉や生徒の発言を拾いながら、班全体に対して気づきを深める問いかけをしていきました。「カフェ・ホスト」が班のなかの話し合いに積極的に関わりながら、生徒の考えを引き出し、まとめていくという進め方は、須藤さんの工夫ですが、限られた時間のなかで効果的に振り返りを行うことができる進め方であるように思われました。



その後、班替えをはさんで、テーマ②「『成功に導く行動や考え』が、これからさらに発揮されるとしたら、クラスは、どうなっていくと思いますか」、そして最初の班に戻って、テーマ③「幸せなクラスを実現するために、あなたがこれからできることは何でしょうか」というテーマで話し合いが続きました。最後に一人ひとりの「行動目標」をワークシートに記入させ、班の中で一人ひとりが宣言をして、授業は終わりました。



授業後の実践検討会では、乾姫志美校長をはじめ嬬恋中学校の先生方、吾妻教育事務所・一場民人指導主事、長野原町立西中学校・篠原正洋教頭、長野原町立北軽井沢小学校・篠原知洋教諭、嬬恋村立千俣小学校・山口暁夫校長、そして教職大学院第2期生でもある長野原町立東中学校・石川直紀教諭、そして教職大学院から院生5人も加わって、熱心な討議が行われました。最後に、一場民人指導主事から講評を頂き、教職大学院を代表して懸川教授から関係者に謝辞を申し上げました。

(文責・音山)

関口 智子(児童生徒支援コース)

平成26年10月23日(木) 前橋市立勝山小学校

児童生徒支援コース2年生・関口智子さんの「課題解決実習」に伴う公開授業及び実践検討会が、10月23日に勤務校の前橋市立勝山小学校(3年2組)で行われました。

関口さんの研究テーマは「数学的な思考力・表現力を育てる算数科学習指導—問題解決的な学習の改善を考える—」です。関口さんはこれまで算数の授業で、「問題解決的な学習」に取り組んで来ました。これは、問題把握(児童が問題を理解する)、自力解決(自分で考えた方法で問題を解決する)、集団解決(クラスの中から様々な解き方を取り上げ、良い解き方を考える)、まとめ(どういう方法で解くとよいかまとめる)、というステップを踏む授業方法です。この方法で児童は意欲的に問題に取り組みますが、①多くの児童には難しすぎる問題が出される、②集団解決に参加できる児童が限定される、③多くの児童は計算手続きの模倣にとどまる、といった問題点も指摘されています。

関口さんは認知心理学の知見をもとに、従来の「問題解決的な学習」に次の工夫を加えました。それは、①児童の既有知識を生かして解ける問題を導入に使うことで、全員が自分の考えを持てるようにする、②自分の考えや友だちの考えを説明する機会を様々な方法で取り入れる、③良い考え方を「考えちょ金」としてノートに記録し、後で参照できるようにする、という工夫です。

公開授業は「かけざんの工夫」の8時間目でした。まず関口先生がハチマキを巻いて授業開始!ハチマキについている値札に21円とあるところから、「21円のハチマキを3本買った。値段はいくらか」という導入問題に入っていました。「20(10のまとまりが2つ)と1にわければ、かけ算九九(筆算)で計算できる」ことを全員が確認したうえで、今度は321円のハチマキが登場!「一本321円のハチマキを3本買うと代金はいくらか、説明できる」という目当てに向かって、児童は集中して取り組みました。321円を300と20と1にわけて考える、お金の絵を描いて考える、導入問題の答えの63に900(300×3)を加える、など児童は一人でいくつもの考え方をし、自分の考えをノートに書きました。さらに、隣同士で説明し合ったり、板書された他の児童の考え方を自分で説明し直したりするなど、多様な説明活動が工夫されていました。児童たちから出された多様な考え方は、表現は異なりますが、いずれも「321を100や10や1のまとまりで考えている」ことは同じです。児童はそのことに気付き、「かけられる数が3けたのかけ算でも、まとまりにして計算すれば、九九を使って答えを求められる」という考え方を「考えちょ金」としてノートに記録し、後で参照しやすいようにインデックスシートを貼りました。

実践検討会には、群馬県教育委員会学校人事課・亀山理映管理主事様、実習校の高平裕寿校長先生はじめ先生方、教職大学院の深谷講師とM1院生5名が参加しました。多様な説明活動で計算のやり方と考え方を往還する学習が出来ていた、考えることが楽しいと思える授業を今後も続けて欲しい、教師が指示なくともノートに「式」「自分の考え」などの見出しが書けておりノート指導が積み重ねられていることがわかった、「考えちょ金」は一人ひとりにとってのヒントカードになるすばらしい活動である等、関口先生のこれまでの積み重ねと、本時の充実した授業が評価されました。また、多様な考え方のどれを取り上げるか、どのように足場をはずして筆算に移行するか、まとまりで考えることの良さを実感するには4けた・5けたのかけ算(例:2310円のハチマキを3本)に挑戦させてはどうか等、「かけざんの工夫」単元の中心に関わる事柄や、説明をどう評価するかというどの教科にも関連する事柄について、活発な協議が行われました。

(文責 佐藤浩一)



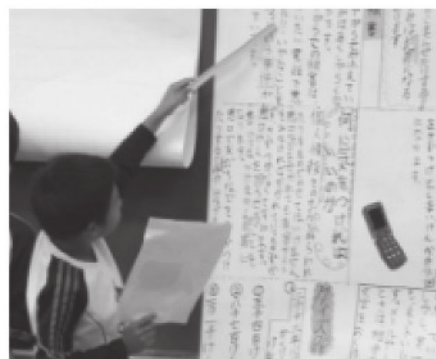
津田 千春(児童生徒支援コース) 平成26年11月12日(水) 前橋市立城東小学校

11月12日、児童生徒支援コース2年生の津田千春さんの公開授業と実践検討会が、前橋市立城東小学校で行われました。

津田さんの課題研究のテーマは「児童の意思決定能力を育てる情報モラル教育に関する実践研究」です。常に持ち運ぶことができるようになったケータイ・スマホは、児童にとっても身近なメディア端末になりつつあります。子どもたちが情報社会の中で安全に生活していくために、情報モラルに関して正しい知識を身に付け、どのように行動すべきかを自ら考え判断し、行動できる力と態度の育成が求められています。



そこで津田さんは、情報モラルをテーマに、プロジェクト学習の手法を取り入れた活動を試みました。小学4年からネットトラブルが増えるという現状を踏まえ、「4年生が安全にインターネットを使えるようにする」という



ビジョンを設定し、その目的を達成するために、ゲストティーチャーの授業や調べ学習を通して学びを展開しました。特に、活動にあたって“何のためにその活動を行うのか”というゴールを明確に示すことを心掛けました。児童が自ら課題を見つけ、目的意識を持って学習活動に取り組めるようにするためです。



授業では、2つの教室に分かれ、「ネットいじめに関するもの」「ネット犯罪に関するもの」「ネットでの高額請求に関するもの」など、グループごとに選んだテーマについて発表を行いました。あらかじめグループごとに、ネットニュースの記事を中心に事前の調べ学習を行い、その内容を壁新聞の形にまとめてあります。発表は、その壁新聞を示しながら行われました。発表が終わるごとに、ワークシートに感想を記入させ、記入後に次のグループの発表に移りました。全てのグループの発表が終わったところで、再び全員がもとの教室に

集まり、全体の振り返りを行なって授業は終わりました。

授業後の実践検討会は、校長先生をはじめ先生方15人にご参加いただき、校内研修で行っている討議形式を取り入れ、3つのグループに分かれて行われました。授業展開や問題解決型学習の在り方など、具体的な示唆が得られ、津田さんの今後の授業づくりに向けた貴重な学びとなったことと思います。

最後に教職大学院を代表し懸川教授から関係者に謝辞を申し上げました。

(文責・音山)



土浦 紗弥(児童生徒支援コース)

平成26年10月31日(金) 高崎市立佐野中学校

10月31日、児童生徒支援コース2年生の土浦紗弥(ストレートマスター)の公開授業と授業検討会が、実習校である佐野中学校の1年7組で行われました。土浦院生の課題研究テーマは、「生徒の学習意欲を高める中学校英語科指導—学習方略を身に付けさせる指導を通じて—」(仮題)です。土浦院生はストレートマスターですが、六月から課題解決実習を開始し、1年7組担任の清水先生のもと、英語科を担当し、授業を行ってきました。

彼女が着目した問題は、中学校英語科において、入学当初は高い学習意欲を示していた生徒たちが、特に中一の夏休み以降、急速にその意欲が落ちていくという一般的な調査結果で示されている現象です。この理由としては様々なものが考えられますが、小学校での外国語活動では中学校でなされるような「評価」がなく、英語に親しむことが第一で意欲の向上に焦点が当たっています。それに対して、中学校では明確な指導のねらいがあり、それに伴って評価が明確になされ、単に意欲面だけではなく、知識や活用面なども求められます。学習事項の難易度も特に夏休み以降急速に難しくなるなどの大きなギャップがあります。このギャップに正確に対応するためには、意識的な学習方略を生徒自らが身に付けていく必要があります。それを中一の初期の時点でしっかり身に付けてもらうような指導を教師がするべきであると考え、その点を自身の課題研究のテーマとされています。



本時は、英語科で「We're Talking 5 (これだれの?)」という単元の中で、全2時間の中の2時間目の授業でした。Whose や独立所有格 (mine, his など) の活用を、身近なものを使って使いこなせるようにするというものでした。実際の授業は英語の歌唱、ディクテーションテストなどの通常授業の帯活動の後に、生徒の身近なもの(教科書でも使われているカバンなど)を使って、それを各グループで回答させるという活用重視の授業であり、単に教え込む授業ではなく、生徒主体での英語の活用を意識し、工夫されたものになっていましたと思います。授業の最後に、1-7で作った旗が誰のものかという問いを設定し、その答として全員で「ours!」と回答させる授業の流れは見事でした。また、ちょうど本時が全実習の最後であったということもあり、終了後に生徒からお礼の手紙と色紙が渡されるなどの、感動的な授業終了場面となりました。長期間にわたり密度の高い実習がなされ、土浦院生の指導力の確実な向上がなされたと感じられました。長期間にわたり、丁寧なご指導を賜った佐野中学校の先生方に御礼申し上げます。

公開授業には実習校の先生方が校長、教務主任、担任の清水先生、本学 M1 も5名、他校の教員も3名、本学から武井教授、指導教員である山口、石川と多数が参加しました。授業後の研究会でも、土浦さんの授業に取り組む誠実な姿勢にお褒めの言葉を多く頂戴しました。ただ、本課題研究テーマを進めていくにあたり、実際に教えねばならない教育内容を押さえた上での、バランス感覚の重要性についても、特に清水先生から言及がありました。土浦さんが来年度以降、現場に着任して活躍されるためにも、学習方略をいかにして授業の中で具体的に教えていくかということを踏まえ、課題研究を早急にまとめることが望まれます。(文責：山口陽弘)

青木 美恵(学校運営コース)

平成26年11月14日(金) 高崎市立塚沢小学校



(ゲストティーチャーから学ぶ児童)



(全員で実践の成果を発表する学年教員チーム)

学校運営コース2年生・青木美恵さんの課題解決実習に伴う公開授業及び実践検討会が、11月14日に勤務校の高崎市立塚沢小学校(第4学年)で行われました。

青木さんの研究テーマは「教員が抱える職務上の課題解決のための方策—初任者教員へのOJT実践—」です。青木さんは、ベテラン教員の大量退職の時期を迎え、初任者教員の増加する中、授業をほかの教員に見せることに抵抗感がある、指導方法について相談しにくい雰囲気がある、OJTがなかなか行われずに一人の教員の研修の成果やそれぞれの教員が持っている個性や良さが学校全体の中でなかなか生かしきれないといった、多くの学校にみられがちな組織的、風土的な問題性の改善を図り、教員同士が積極的に関わり合う意図的・計画的なOJTの有効性を検証することで、教員が抱える負担感や困り感などの問題の解決を図ろうと考えました。

そのため、ベテラン、ミドル、若手が学年を構成する中で、「学年経営」「授業」「保護者への対応」「児童への対応」「学年・学級事務」などにみられる職務上の課題解決に協働してあたり、それぞれの教員の持つ良さを発揮できる学年経営の在り方を実践的に明らかにしようとしていました。

この実践検討会で行った公開授業は、第4学年の「総合的な学習の時間」の大単元「私の町のすてきな人」でした。塚沢小学校では第3学年から第6学年まで地域の学習素材を生かした教育課程を編成し、実施しています。4年生では「人」を視点に社会科などの教科学習と関連させながら、子どもたちが地域への親しみを深め、地域の多くの人々の支えの下で自分たちの生活が営まれていることを、子どもたちが主体的に問題解決的に学んでいく計画となっています。青木さんは、同学年の4人の先生方で協働し、多くの保護者や地域の方々の協力を得て、単元の指導や支援を進めてきました。本時では、子どもたちが学級の枠を超えて自分の追究したいテーマに合ったグループを作り、ゲストティーチャーとして協力してくださった保護者の方にインタビューしたり、コミュニケーションを図ったりしました。

子どもたちの主体的な活動の姿は素晴らしく、7つのグループすべてが先生の力を借りることもなく、自分たちで進行し、積極的にゲストティーチャーから多くのことを学んでいました。また、特別支援学級(知的・情緒)に在籍している児童も加わっていましたが、そうした児童が全く分からないなど、児童の助け合い協力し合う姿は4年生とは思えないほどでした。参観者からもそれを支えた学年の先生方のチームワークとこれまでの取組の努力を賞賛する感想が多く寄せられました。

授業後の実践検討会でも、青木先生だけでなく学年の4名の先生方全員も発表者として加わり、これまでの第4学年の取組が発表されました。初任者の学びが大きいものであったのは無論のこと、ベテランを含む全員の先生方から、この実践で新たに学ぶことがあったなどと有効性が発表されました。

実践検討会には、県教委学校人事課・鈴木智行管理主事、高崎市教委学校教育課・岡田直久指導主事、本学新藤慶准教授、高橋望准教授、塚沢小の小柴孝子校長をはじめ、高崎市内小学校教諭、群馬大学教職大学院生、群馬大学教育学部生等多数の参加がありました。鈴木管理主事からは本実践が「学年経営、組織運営、キャリア教育」の面で、岡田指導主事からは「総合的な学習の時間、OJTなど」の面で大きな意義があり、今後この成果をぜひ広く県内の学校に汎用できるようにまとめてほしいとの期待の言葉を頂きました。最後に教職大学院・矢島教授から謝辞を申し上げ閉会となりました。(文責 矢島 正)

新井 健一(学校運営コース)

平成26年12月5日(金) 伊勢崎市立豊受小学校

12月5日(金)に、学校運営コースの新井健一さんの公開授業と実践検討会が、勤務校である伊勢崎市立豊受小学校で行われました。

新井さんの課題研究テーマは、「教師の意識的な実践を促すキャリア教育の推進—キャリア教育の視点に立った総合的な学習の時間の再構築を通して—」です。当日は、テーマにかかわる研究の報告と、研究の一環としての6年生の「総合的な学習の時間」の授業「自分の生き方について考えよう—第2回生き方教室—」(開・閉会式を体育館で、外部講師による授業を教室6室でそれぞれ開催)が公開されました。



総合の授業は、8～9月に開催された「第1回」に続くものです。6名の外部講師がそれぞれ3回ずつ同内容の授業を行い、児童は教室を移動して各自3つの授業を聴く、という形態は共通ですが、もっぱら教師が運営した第1回に対し、第2回は、事前の外部講師との連絡から、当日の受付、外部講師の応対や案内、開・閉会式および各教室での司会進行に至るまで、6年生の児童が担当しました。

第2回の重点は、こうした活動による「課題対応能力」、「人間関係形成・社会形成能力」といった諸能力の育成ですが、各講師の話の内容についても、

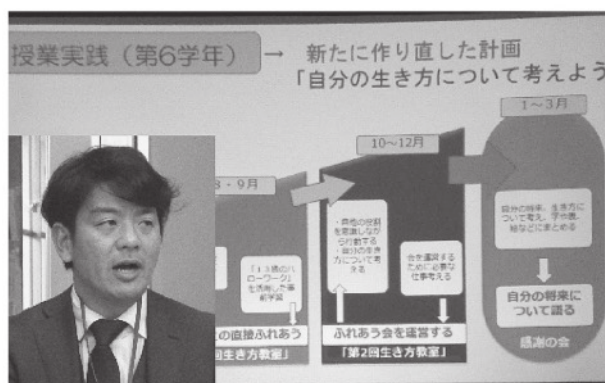
事前に直接講師のところに足を運んで綿密なコミュニケーションをとる(ここでは教師もかなり動きましたが)などの工夫により、児童たちにわかりやすいものになっていました。

課題研究についての報告では、新井さんはまず、勤務校の学校課題を、「思考力、判断力、コミュニケーション能力(の弱さ)」、「夢(について考える機会の不足)」という児童の資質・能力面の課題と、「『総合的な学習の時間』の見直しの必要性」という教育課程編成上の課題とから整理しました。加えて、「キー・コンピテンシー」など現代的諸能力の育成が求められているという状況もふまえ、一連の課題を効率的に、教師たち・児童たち双方の力になる形で解決する手段として、新井さんは、「キャリア教育の視点から総合的な学習の時間のカリキュラムを再構築する」ことにとりくんできました。

その際の2つの柱として、「『探究型の単元構成』を意識した年間指導計画の見直し」、「地域・保護者との連携の見直し」を新井さんは提案しました。具体的には、3年生から5年生については、基本的に前年度までの計画を引き継いで実践していく中で、地域との連携のあり方を修正したり、体験活動と教科学習との関連について整理したりといった形で、年間計画の改善点、新たなアイデアなどを蓄積していきました。

一方、新井さんが担当する6年生については、年間計画を新たに作り直し、「自分の生き方について考えよう」という大テーマのもと、修学旅行(とくにキザニアでの体験)、2回にわたる「生き方教室」を実践してきました。

公開授業および実践検討会には、指導教員の岩澤、山崎のほか、児島啓介教頭はじめ豊受小学校の先生方、教職大学院生4名が参加しました。指導・講評を担当された伊勢崎市教育委員会の今井靖指導主事からは、豊受小学校の実践を継続的に観ていただいた中での児童たちの成長を高く評価していただくとともに、自らの学校の課題を研究テーマに据え、その解決を実践的に進める教職大学院の課題研究の意義についてもご指摘いただきました。(文責：山崎雄介)



神戸 智宏(学校運営コース)

平成26年12月5日(金) 下仁田町立下仁田中学校



学校運営コース2年生・神戸智宏さんの課題解決実習に伴う公開授業及び実践検討会が、12月5日に勤務校の下仁田町立下仁田中学校（第2学年）で行われました。

神戸さんの研究テーマは「地域づくりの担い手育成をめざす総合的な学習の時間のカリキュラム開発―「下仁田ジオパーク」を活用した実践を中心に―」です。神戸さんは、少子化・高齢化の時代を迎え、特に過疎化が進む地域においては児童生徒の切磋琢磨の機会の減少や、一定規模の集団を前提とした教育活動ができにくくなる実態を踏まえ、「総合的な学習の時間」のカリキュラムの開発を通してこうした問題の解決を図ろうと考えました。国においても第2期教育振興基本計画における四つの基本的方向性の中に「絆づくりとコミュニティの形成―社会が人を育み、人が社会を作る好循環―」として示されているのは、「地域が学校における子どもたちの学習を支援する」という関係性だけでなく、「子どもたちが学習活動を通じて地域の活性化に寄与する」という関係性もあるという双方向的な価値を「総合的な学習の時間」の学習を通じて明らかにしようと考えました。

また、中学校における「総合的な学習の時間」の充実のためには、学年を担当する教員が生徒の指導に協働してあたり、それぞれの教員の持つ特性を発揮して効果的な分担制をとりながら生徒の学習の支援を進める学年・学級経営にも着目してきました。

公開授業は、第2学年の「総合的な学習の時間」の大単元「下仁田ジオパークの魅力を広めよう」の最終的な成果発表会でした。下仁田町では町の教育研究所において「郷土に親しみ郷土を愛し郷土を誇りに思う児童・生徒の育成」を研究主題に小中連携による「下仁田学習」を構成しています。神戸さんは町研究所の所員としても単元題材開発に取り組んできました。下仁田町は「日本ジオパーク」としての指定を受けるほど特徴ある貴重な地質の土地であり、下仁田小学校と下仁田中学校はこの地域的な教育資源を生かした学習活動の工夫に取り組んでおり、神戸さんは自分の担当する第2学年において、生徒のこれまでの学習や活動の経験を生かしたカリキュラムの再構成を実践的に試みたのです。

「下仁田ジオパークの魅力を広めよう」の学習は、前期（5～7月）と「職場体験学習」を挟んでの後期（10～12月）の学習とに分割して行われました。これは、生徒が前期での学習経験を活かし、また、職場体験学習での経験も踏まえて、後期には創意工夫を生かした活動ができるようにと考えてのことです。実際、「案内看板作製」「リーフレット作成」「ポスター制作と掲示」「ウェブページ制作」の班に分かれた生徒たちは、地域の人々との交流を通して、自分の故郷である下仁田という地域に対する理解と愛着を深めていったことが、その発表内容からもよく伝わってきました。

公開授業では、生徒たちの発表後、同学年の他の先生方からも生徒たちの活動の様子へのコメントがありましたが、長期にわたる生徒たちの活動の変容や成長がそのコメントから理解できました。

実践検討会には、県教委学校人事課・川端管理主事、西部教育事務所・井上指導主事、本学新藤慶准教授、高橋望准教授、下仁田中茂木校長、下仁田小萩原校長をはじめ同校及び甘楽郡内の先生方、群馬大学教職大学院生、等多数の参加があり、様々な意見交換がありました。井上指導主事からは、本実践は「生徒が内容知だけでなく方法知を獲得した」「学ぶことの喜びに気付けた」「協同的に学ぶ良さに気付けた」などの成果が見られ、今後はより探究的な学習過程で生徒の思いが表れるような活動を目指してほしいとの指導講評をいただきました。最後に教職大学院・矢島教授から謝辞を申し上げて閉会となりました。（文責 矢島 正）

周東 景子(学校運営コース)

平成26年12月3日(水) みどり市立笠懸小学校

12月3日(水)に、学校運営コースの周東景子さんの公開授業と実践検討会が、勤務校であるみどり市立笠懸小学校で行われました。

周東さんの課題研究テーマは、「教師の授業力向上のための手立ての工夫—教師全員が参加する校内研修と子ども全員が参加する授業を目指して—」です。当日は、このテーマにかかわる実践を通じた研究の報告と、研究の一環としての5年生の算数の授業(5年5組、担任の渡辺正大教諭とのTT+支援員1名)が公開されました。



まず、算数の授業では、単元「図形の面積」のうち、既習の長方形や平行四辺形の求積公式を応用して、三角形の面積の求め方を考えるという課題に児童たちがとりくみました。

児童たちは、方眼紙に描かれた同じ三角形を4つ与えられ、これを自由に変形(切り貼りも含めて)することを通じ、面積を求めました。児童ごとの進度の差が大きかったこともあり、残念ながら当初の予定まで進みませんでした。しかし、笠懸小学校の校内研修でめざしてきた「授業のユニバーサルデザイン化」の成果が随所にみえる授業でした。

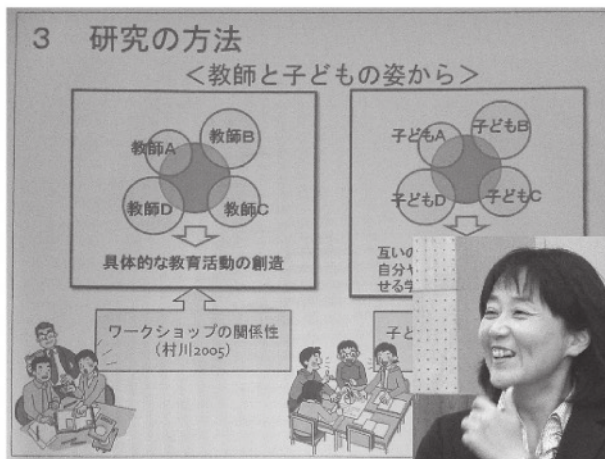
後半の実践検討会では、周東さんが研修主任として主導してきた笠懸小の校内研修について、詳細に報告されました。

周東さんは、以前に同じ笠懸小で研修主任としてとりくんだ「授業のユニバーサルデザイン化」にヒントを得て、「子ども全員が楽しく『参加』『理解』できる授業」、「みんなが楽しく『わかる』『できる』授業」をつくるための校内研修もまた、「全員が楽しく参加できる」ものであるべきだと考えました。さらに、子ども同士が授業で学びあい、認め合う姿と、教師同士が校内研修で学びあう姿とをアナログカルにとらえ、こうした姿を実現させるための手立てを1年次に構想してきました。

ところが、今年度と来年度、笠懸小が文部科学省から人権教育の研究指定をうけ、また今年度、県東部地区の人権教育研究協議会の会場校ともなることが決まりました。これをうけて周東さんは、研修の範囲を教科の授業から学校教育全体に拡張し、「授業研究」、「人間関係づくり」、「調査・環境整備」の3部会や学年組織など、多層的な組織編成を行って研修をリードしてきました。また、指定研究が陥りがちな「紀要や指導案づくりが自己目的化し、教師の力になっていかない」という事態を克服すべく、「教師力パワーアップ作戦」などさまざまな手立てを講じてきました。

こうした一連の実践は、みどり市教育委員会の大澤智指導主事から「研修のユニバーサルデザイン化という視点は斬新であり、他の学校にも発信してほしい」と高く評価していただき、また東部教育事務所の栗原淳一管理主事からも、「周東さん個人のとりくみに留めず、笠懸小の他の先生方にも引き継いでほしい」と激励の言葉をいただきました。授業および実践検討会には、指導教員の岩澤、山崎のほか、清水直海校長をはじめ笠懸小の先生方、市内他校の先生、教職大学院の院生9名が参加してくださいました。

(文責：山崎雄介)



二宮 一浩(学校運営コース)

平成26年12月1日(月) 太田市立綿打中学校



学校運営コース2年生・二宮一浩さんの課題解決実習に伴う公開授業及び実践検討会が、12月1日に勤務校の太田市立綿打中学校(第1学年)で行われました。

二宮さんの研究テーマは「組織的な家庭学習指導の確立を目指す推進体制づくり―教科担任、学級担任、保護者の連携を通して―」です。二宮さんは、これからの社会においては、生涯にわたり学習する基盤としての『自己指導能力』の育成の重要性をふまえ、特に中学生においては、現在及び将来においての自己実現を図っていくための力を育成するには「家庭学習」が重要であるにとらえました。これは「家庭学習」が教師の直接的な指示を伴わない子どもの自律的な学習の場として重要な役割を持っていると考えてのことです。さらに、二宮さんは、小学校から中学校に進学すると生徒の「家庭学習」への取組状況が実は低下するという傾向を、全国的な調査や自校での調査などから見取り、ここには生徒自身の心理的な課題や学校生活の変化に伴う課題、中学校側には教師間の共通理解や協働性の面での課題が影響しているとも考えました。これは中学校では教科担任制となるため、日によって家庭学習として出される「宿題」の量が大きく変動したり、定期テスト前などには集中することで生徒の負担増になっている事実起因しています。こうしたことが、生徒の学習への計画的な取組への阻害要因になっているにとらえました。

こうした課題を解決するために、二宮さんは「教員の協働性を高めること」「生徒の個に応じた対応を行うこと」「保護者との連携を図ること」の3点を課題解決の視点とし、それぞれ、宿題予定表を提案し活用を図ったり、校務支援グループウェアソフトの C4th の機能を活用した「いいところ見つけ」の書き込みをすすめたり、学習の手引きを活用して「家庭学習」の効果的なやり方を指導したり、生活ノートの点検、また、特に指導を有する生徒については保護者との連携を密にして指導の効果を上げるような工夫をしたりしてきました。そして、第1学年の学年主任として、学年所属の他の教員と連携し、学年全体に目を配りながら指導を進めてきました。

この実践検討会で行った公開授業は理科で、自作の一弦ギターやゴム紐の張りを利用した振動の様子を可視化できるしくみでの実験を通して、音の大小や高低の原因を探るというものでした。生徒は主体的かつ積極的に学習に取り組んでおり、実験を通して得た知見を少人数の班ごとに適切に発表していました。生徒が入学後の4月当初に比べて、学習に取り組む姿勢や学びを通して得た内容の深化などで格段の成長の跡が見られました。

授業後の実践検討会では、同校の他の先生方から、入学以来の生徒の変容について二宮先生の実践の成果が出ているという肯定的な意見が多く出されました。また、太田市教委の半田指導主事からは授業を通して日簿の学年学級経営の充実度が理解できること、家庭学習での経験が実験結果の予想などの書き込みに反映されていたこと、理科の学習で大切な実験の条件制御や規則性の発見など、学習の仕方についての生徒の成長が見て取れるなどの講評をいただきました。

実践検討会には、同校の曾根校長はじめ全教員、太田市教委の細谷指導主事、太田市内の小中学校の先生方、本学山崎教授、新藤准教授、高橋准教授、教職大学院生等多数の参加がありました。曾根校長からは、今後この二宮先生の成果を学校全体で共有し、生徒の学校生活の充実や学力向上に活かしていきたいとの言葉も頂きました。最後に教職大学院・矢島教授から研究推進にご協力いただいた同校の先生方に謝辞を申し上げ閉会となりました。(文責 矢島 正)

柵木 秀樹(学校運営コース)

平成26年11月28日(金) 藤岡市立美九里東小学校

11月28日(金)に、学校運営コースの柵木秀樹さんの公開授業と実践検討会が、勤務校である藤岡市立美九里東小学校で行われました。



柵木さんの課題研究テーマは、「社会に自立する力を育むキャリア教育の推進～児童の意欲向上を目指した教育実践を通して～」です。当日は、このテーマにかかわる実践を通じた研究の報告と、研究の一環としての6年生の学級活動の授業が公開されました。

まず、学級活動の授業は、「6年生としてできることを考えよう～卒業プロジェクト」をテーマとした話し合い活動でした。これまで、最上級生として縦割り活動や委員会活動にリーダーとしてとりくむ中で少しずつ成長してきた児童たちには、

「卒業に向けて何かしたい」、「美九里東小学校に何かを残したい」という思いが芽生えてきています。こうした思いを受けて児童たちが企画した「卒業プロジェクト」の一環として、当日は、モザイクアートの内容についての話し合い活動が公開されました。

最初は参観者の多さに緊張していた児童たちですが、司会者の進行の的確さもあって、話し合いの後半では、モザイクアートにフィーチャーする文字について、最終的に残った2案についての賛成意見、反対意見を活発に交わしていました。

後半の実践検討会では、柵木さんがとらえた美九里東小の児童の課題である「意欲」を、教育活動全体を通じて育ててきた一連の実践が詳しく紹介されました。

一般にキャリア教育では、関連する能力の構造図のうち、「基礎的・汎用的能力」が強調されます。しかし、とくに小学校では、図では左端に置かれた「意欲」が、全体の基盤とされている「基礎的・基本的な知識・技能」も含めたすべての基礎となるのではとの仮説のもとに、柵木さんは、「意欲」をすべてのベースとしてこの構造図を再編しました。

実践的に、「日々の授業」では、研修主任と連携し、意欲的にとりくめる「社会や生活と結びついた学習課題」を設定した授業を全校的にめざした校内研修を進めました。

一方、「日々の活動」では、縦割り班による読み聞かせや集団遊び、学校行事、学級活動、キャリアに視点をあてた教育活動などに、柵木さんが担任を務める6年生を中心にとりくんできました。「キャリアに視点をあてた教育活動」としては、美九里東小OBや藤岡市出身のさまざまな分野の職業人を講師として招いた「生き方をみつめよう～メッセージ～」が詳細に紹介されました。

当日は、岩崎浩一校長をはじめ美九里東小学校の先生方、藤岡市小学校進路指導部会の先生方のほか、教職大学院からは指導教員の岩澤、山崎、矢島教授、高橋准教授、院生5名、さらに、高橋准教授のもとに来日していたニュージーランド・オークランド大学のCarol Mutch准教授も参加しました。

指導講評を担当された藤岡市教育委員会の五十嵐豊指導主事からは、話し合い活動の中で児童の姿にも言及しつつ、学校の全教育活動を「キャリア教育」というフィルターで見直すことによって効果を挙げた柵木さんの実践を高く評価していただきました。

(文責：山崎雄介)

